

# 私の一冊

社会福祉学科 尾崎剛志 先生

著者名 渡辺一史著 『こんな夜更けにバナナかよ  
～筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち～』

小鹿図書館 490.4/W 46

私がこの本に出会ったのは、大学院を修了し、専門学校で教員として働き始めてしばらくしてからだったと思います。何気なく手にした本でしたが、まずはタイトルに惹かれたのだと思います。サブタイトルには内容を簡潔に示した「筋ジス・鹿野靖明とボランティアたち」と書かれているのですが、それよりも大きく太くタイトルが書かれ、さらにバナナの挿絵が描かれていました。重たい話を軽いタッチで表現しようとしたのかな、と思わせるものでした。

この本を原作として、2018年12月に映画化されています(そちらは観たことが無いのですが)。大泉洋さんや故 三浦春馬さん、高畑充希さんなどが出演しています。興味がある方は映画作品から入っても良いかもしれません。

筋ジストロフィーという病気は、筋力低下や運動機能障害など様々な進行性の障害が生じる疾患の難病として知られています。その疾患をもつ鹿野が1990年代後半に家族とではなく、一人で暮らすために学生や社会人などのアルバイトを巻き込みながら生活を維持していくプロセスが描かれています。当時も現在もそうですが、お世話を受けるから「わがまま」を言うてはいけないというような雰囲気のある中、鹿野は「自分のしたい生活」・「人間らしい生活」を実現するために、ボランティアとぶつかりながらも「自分らしい生活」・「人間らしい生活」を作り出す努力を続け、そこに関わるボランティアもいつの間にか鹿野に巻き込まれ、生き方を変えるようなケースも描かれています。ボランティアの介護者が何かを「してあげている」のではなく、鹿野から影響を「受け取っている」ことが様々な場面で描かれています。また医療関係者との関係においても、「人間としての尊厳」と「生命の維持」のせめぎ合いで、ぎりぎりのところまで「鹿野靖明」として生きることを模索し続ける姿が描き出されています。

障害者福祉の領域では「人権」や「権利」の重要性、個人を変えることに主眼を置くのではなく「環境」を調整することの重要性を伝えています。この本では、「人間らしい生活」とはどのような生活なのか、それをボランティアに頼りながら綱渡りのようにして継続するというところにどのような問題があるのか、さらには、「障害者」と呼ばれる人々が実現したいことが、「わがまま」と捉えられことにどのような「差別」や「偏見」の意識があるのか、様々なことを考える良い機会になるのではないかと思います。ぜひ手に取ってみてください。